

## 五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(2)

寺西 俊英

2日目(5月21日)の夜が明けた。今日は鑑真和尚の故郷・揚州に向かう。揚州と言えば次の李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を思い浮かべる。黄鶴楼は、「中国三大カマド」の一つと言われる武漢市内を流れる長江に面して建っているが、そこから揚州まで延々と船で下って行く様を詠っている。

故人西辞黄鶴楼  
烟花三月下揚州  
孤帆遠影碧空尽  
唯見長江天際流

中国には、必ず訪問したい都市がいくつかあるが、揚州は是非行ってみたかった街である。揚州は隋の煬帝が造らせた「京杭大運河」が有名である。北京から杭州までの約2500キロメートルに及ぶ長さであるが、この運河は長江の北岸にある揚州で交差したため、揚州は交通の要衝になった。江南の豊かな物資が都に直接運べるようになったことから当時、長安、洛陽に次ぐ大都会であった。大運河は物資を北へ輸送する新たなルートになっただけでなく、南北の文化交流に大いに寄与した。隋は運河などの大工事で民を疲弊させ、高句麗への3度の遠征で庶民の心が離れ30年という短命で終わった。しかし、大運河は東流するいくつかの大河川で分断された国土をまとめやすくし、中国の統一に多大なる貢献をした。次の唐代(618年～907年)は300年の長期政権を維持することが出来たが、これも大運河の恩恵を被ったと言えよう。

さて、ホテルの駐車場で待機していたバスの前で記念写真を撮り、我々は8時15分頃出発した。南通から揚州まで約200キロあり、10時半過ぎに揚州市内の「瘦西湖」に到着した。「瘦西湖」とは、杭州にある有名な「西湖」を真似て造ったと言うことであるが西湖より痩せてほっそりとしているのでこの名が付いたとか。私は真似て造った割にはあまり似ていないと思うのだが。

この湖の見どころは、「五亭橋」と「二十四橋」とい

う。瘦西湖は揚州のシンボルと言われるそうであるが、五亭橋は瘦西湖のシンボルである。頑丈な石造りの大きな橋の上に四阿を五つ連ねたような形をしていて、一度見るとその姿を忘れることのできないほどの優美さである。五亭橋は、清の第6代皇帝の乾隆帝(1711年～1799年)の南巡に合わせて造られた。完成してすでに200数十年が経っている。乾隆帝は江南地方が好きらしく、この地には6回も行幸しており杭州や紹興など各地を巡りそこで詩歌を残している。橋の中程からは遠くに「釣魚台」が望まれ、一幅の絵のようである。釣魚台は字の如く乾隆帝が行幸の際、釣り糸を垂れて楽しまれたところであるが、この場所から見る五亭橋が一番素晴らしいと言われている。

揚州と言えば「塩商人」が有名だ。塩を作っているのではなく、今の商社のように塩の流通を一手に握り、巨万の富を築き上げたのである。蘇州にも富豪が造った庭園がたくさん残り世界遺産となっているが、揚州も蘇州ほどではないがカネに飽かした庭園がいくつも造られた。【しかし太平天国の乱(1851年～1864年)、辛亥革命(1911年)、第一次国共内戦(1927年～1937年)などで当時の庭園や街並みは殆ど失われた】彼らは皇室との関係を強化し権益を守るため、帝の南巡に合わせて詩歌の好きな帝のために五亭橋を造りゴマを擦ったりしたのだ。また、北京の北海公園にある白塔を真似て帝の旅の



優美な姿を見せる五亭橋



瘦西湖の入口

慰めとして白塔を造った。

二十四橋については、ガイドによると〈橋の長さ24メートル、幅2.4メートル、橋の両側の石段各24段・・・〉としたところからの命名のようであるが、このような石造りのタイコ橋は中国各地に似たような橋があり私にはあまり印象に残らなかった。

瘦西湖を見終わって近くのホテルの2階のレストランで昼食を摂った。昼食なのに食べきれないほどの料理が出て来た。午後の予定は、鑑真が住職であった大明寺、揚州随一の名園である个園(個園)、清代の揚州を再現した東関街を見てホテルに向かう。揚州の有名な観光地はこの辺りに集中していて、効率的に回れるのもよい。食後、このホテルから歩いて大明寺に向かった。

大明寺は、鑑真が日本に来る前にいた寺院である。大きな構えの門から中に入ると境内は結構広い。すぐ目についたのは九層の「<sup>すいれいとう</sup>栖霊塔」である。塔を遠くに見ながら左側に目を移すと、日中両国が協力して建てた「鑑真記念堂」がある。中は薄暗く深閑としていて中央に鑑真の座像がある。この座像は、唐招提寺の御影堂にあるものと同じで思わず手を合わせた。御影堂のそばにある石碑に、松尾芭蕉が唐招提寺を訪れた際に詠んだ句、〈若葉して御目の栗ぬぐはばや〉を思い起こさせる。記念堂の周辺は緑に囲まれていて皆で散策を楽しんだ。大明寺は前述の太平天国の乱で惜しくも全焼した(1853年)。しかし1870年には再建されている。中国はその昔から幾多の戦乱、近年では紅衛兵による全土に及ぶ破壊行

動でどのくらいの国宝級の文物や建築物が無に帰したことであろうか。

ここで鑑真(688年～763年)の足跡を改めて辿ると・・・

鑑真は、揚州で生まれ14歳で出家し、大雲寺に住んだ。長安・洛陽で修業を積み713年に故郷の大雲寺に戻る。さらに研鑽を積み江南第一の大師と称されるに至る。宗教界における鑑真の評価は極めて高く、いずれは中国仏教界の最高位に就く人と見られていた。そのような時、742年に遣唐使船で唐を訪れていた留学僧の栄叡、普照から、聖武天皇が戒律を日本に伝えるよう懇請されたことを伝えた。その時に鑑真のとった行動は周囲を驚かせた。招請を受けて鑑真は僧侶を一堂に集め、この中に日本で戒律を行うための希望者を募ったが、誰一人として手をあげるものはいなかった。何も荒れ狂う東シナ海を渡るといふ危険を冒してまで皆は行きたくなかったのである。その場の様子を見た鑑真は自分が行くことを決意した。師匠が行くとなるとさすがに知らぬふりはできなかつたと見え、結局17人の僧侶が随行することになった。そこから苦難の連続であった。危険な旅に出ようとする師匠を気遣って弟子が勝手に渡航を中止させたり、何度も暴風に遭遇し、南の海南島まで船が流されたりしながらも、ついに6度目で沖縄にかりうじて漂着した。そこから島伝いに大宰府までたどり着き、ついに753年渡航に成功した。そして亡くなるまでの10年間、唐招提寺や東大寺において多くの人に戒律を授けた。しかし5度目の航海の時、無理がたたって失明した。

さて、有名な鑑真の失明した姿の座像は、死去を惜しんだ弟子の「忍基」という僧が彫像を造った。日本最古の肖像彫刻であり、国宝である。大明寺の記念堂にある座像は、実は本物が1980年に揚州に里帰りした時に模して製作されたものである。里帰りした時は、大変なニュースになり一目見ようと21万人もの人々が訪れたそうである。日中両国民にこれだけ尊敬を集めた人物を他に私は知らない。

揚州については、2回に分けて書いていく予定である。次号は、名園の个園(個園)、東関街、そして揚州の文化などについて述べて行きたい。(続く)